

横浜市小学校社会科研究会

4 学年部会

研修会記録

第2号

令和3年9月8日

横浜市小学校教育研究会

会長 後藤 俊哉

横浜市小学校社会科研究会

会長 梅田 比奈子

同 学年部長 岡村伸一郎

【提案日時】

7月7日（水）

提案 本間 宏志 先生（末吉小）

【会 場】

横浜市立 平沼小学校

司会 三浦 智 先生（高舟台小）

記録 杉内 翔太 先生（大豆戸小）

単元名：ごみはどこへ ～まちをきれいにするために私たちにもできること～

提案者より 自分の実践の様子をふり返りながら、授業作りを見直すきっかけになれば嬉しい

視点① 子どもの予想と見通しを大切にした単元作り

子どもたちが自分たちでつくっていく学習計画

- ① 計画段階 ごみ調べ→たくさんのごみがでている→単元を見通す学習問題
- ② 学習が進行した場面 もやすごみはわかった→それ以外がわからない
- ③ 目標の達成状況を自己評価する
 - ◎「何を学んだか」はふり返りができていた。
 - △「どのように学んだか」を自覚するふり返りが少なかった。

視点② 本気の学習問題を追究し、社会的事象の意味等に迫る授業づくり

・本気の学習問題の成立過程

- ① 灰がどこでどのように処理されているか調べたことを基に話し合う。
- ② 最終処分場の動画を見る。
- ③ Sさんの話（90万トンと70万トン減らさないと、50年使えない）

☆教師の資料を中心に引き出したので、子どもたちの切実感があつたか。

・本時が社会的事象の意味等に迫っていたか

- ① ごみを減らすための子どもたちの考え（食品ロス、マイバッグ、灰の再利用等）
- ② 資料提示後の話し合い（習っていない円グラフの読み取りが難しかった）
- ③ 横浜市の現状を踏まえて学習問題をふり返る
 - ◎現状とつなげて自分の考えをつなげたふり返りも見られた

△「燃やすごみを減らす→最終処分場を利用できる期間がのびる」の共通理解が不十分

☆学習問題の文言を「ごみ」ではなく、「燃やすごみ」にすればよかつた？

協議内容 ☆…協議の視点 Q…質問 A…授業者の先生より ・感想

☆教師の資料を中心に引き出したので、子どもたちの切実感があつたか。

Q 本時までの学習過程はどのように進んでいたのか。

A 神明台の後に、海の南本牧の動画を見たので、海を汚さないようにという意識が高かつた。新しい処分場を作る計画がない。→30年ではまずい・・・という流れだった。

- ・「計画10年、工事10年」事実と触れると、より切実感が生まれたのではないか。
- ・「こんなに長持ちさせた横浜市がすごい」という捉えでいくと、この学習問題自体に切実感をもたせるのは難しいと感じた。

A 子どもたちは「ごみを減らした方がよい」という結論はわかっているけど、横浜市が努力してきた背景や実情も理解した上で実践していくことを大切にしたい。

- ・ 「20トン」という事実と向き合わせた中で本気になっていくのがすごい。「27年後には計画を立てないといけない。その計画を作るのは、子どもたち」という所長さんからの手紙で考えさせた。背景を理解した上で実践していくことが大切だと感じた。

☆学習問題の文言が「ごみ」ではなく、「燃やすごみ」にすればよかった？

- ・ 子どもが静かになった要因として資料提示のタイミングも影響しているのではないかな。食品ロスに絞るのであれば、前時に出しておいてもよかった。

A 確かに燃やすごみにもつながる。前時でもよかったが、他の資料もないので本時で出した。

- ・ 「資源物を大切にするとごみを減らす＝処分場が長持ち」と捉えている児童が混在していた。
- ・ 同じように円グラフで実践したが、やはり正しい読み取り難しかった。分別できていない写真を補足することで、視点を絞ることはできたかもしれない。
- ・ 食品ロスが15万トンと考えると、そこを減らすための選択判断になっていくのではないかな。
- ・ 焼却する過程があるので、ごみの量がそのまま埋め立てる量になっているわけではない。

A 24の児童の発言を資料とつなげて広げられると、迫っていったのではないかと後悔

Q 子どもたちの認識として、最終処分場に運ばれる灰の中に資源物（ペットボトル等）が入っていると思っていたのか。

A そう認識してしまっている児童もいて、文言の言葉も「ごみ」だったので混乱してしまった。

- ・ 横浜市が手を尽くしてくれているということや学習過程の中で身につけてから、自分たちにできることを考えると、食品ロスに視点が向いたのではないかな。
- ・ 資料を悩みながら実践をされていて、よかった。ねらいはずれていても、最終的には答えにたどり着いていた。可視化できるものとしては、食品ロスがよかったのでは。次時で選択判断の時間があるので、本時は食品ロスに絞って資料提示できたのではないかな。

<講師の先生より>

4学年世話人校長 上瀬谷小学校 大竹 貴子先生

子どもたちが自分事としてふり返りを行うことができた実践だった。先生のクラスの子どもたちが育っている。「自分のノートをテレビに映して話す姿」「Oページを見てください」という発言も素晴らしい。

本気になるためには、事実をとことん見ていくとよかった。話にもあった「計画10年、工事10年」や処分場のすごさ（想像以上に大きい、走る地面が動いて均一に埋め立てができるようになっている、自然環境にも配慮している）を捉えて、こんなにすごいことを苦勞して管理しているんだという実感を持つことができると、切実感につながるのではないかな。

本時の学習問題の文言は、提案者の先生の言う通り、灰に焦点を当てると燃えるごみになったのではないかな。また、円グラフを丁寧に読み取っていく過程があれば、「もっとリサイクルに出さないと」など焦点がまとまっていくのではないかなと感じた。

ふり返りの書き方もどう書かせるか声をかけることで内容も変わってくるのではないかな。7番は「友達の意見が一番」とふり返っていて、学び方のふり返りができていると言える。

SDGsが進む世界と比べてみると、日本はまだまだ遅れているところもあるので、その部分にも触れていけるとよい。